

三尾(和歌山)に移民資料館 カナダ生活の用品や写真を展示

カナダ移民のゆかりの地、和歌山県日高郡美浜町三尾に、今年三月、移民時代の生活を偲ばせる品物や写真を展示した「アメリカカ村資料館」(写真)ができた。

資料館は国鉄紀勢線御坊駅からバスで二十分の日の岬パークに新築された、白亜のコンクリート造り。日の岬パークを経営する日高観光会社が建てたもので、地元の人々から提供された西洋ノコギリ、ミシン、洗たく板、婦人コート、蓄音機、石油ランプ、明治四十五年発行のパスポートなど、約四百点が展示されている。また、読売新聞大阪本社が昨年五月以来、各地で展示した「カナダ移民百年写真展」



の写真も、同資料館で常設展示される。労働争議による時間ロス
昨年是对前年比で七〇%減

カナダにおける昨年のストライキやロックアウトによる労働時間のロスは、一昨年より七〇パーセント減の延べ三百四十二万人/日にとどまった。カナダ労働省によると、昨年のストライキおよびロックアウトは七百七十六件で、二十一万六千五百六十一人の労働者が関係した。一昨年は、合計千九十三件のストやロックアウトがあり、百五十七万九百四十人の労働者が関係し、労働時間のロスは約千百十六万人/日にのぼった。

「目で聞く」電話を開発 耳が不自由でも通話可能

耳の不自由な人でも電話で話ができます——そういう装置が、最近カナダで開発された。身体障害者用の器具作りを専門とするトロント大学の技師ウィリアム・ドイル氏と医療研究のコンピューター・コンサルタントをしているウィリアム・ランス氏が共同で開発したこの装置は、「シー・トーン」(見える音)と呼ばれ、ブッシュホンでキーを組み合わせて送った信号を符号にかえ、ポケット電算機に似た十六文字の盤面に映し出す。耳の不自由な人はその符号を読んで、相手に返事をすればよい。通話者が耳の不自由な人同士の場合は、両方ともこの装置を用いる。

「シー・トーン」は、大きなシガー・ケースぐらいの大きさで、吸盤がついており、どんな電話にも装着できる。電源

は電池でも、あるいは普通の電気にプラグしてもよい。符号の読み方は、十分もあればマスターできるといふ。

●書評● 「BC州初期水産業 における 日系人の役割」

(The Role of Japanese Canadians in the Early Fishing Industry in B.C.)

本書はブリテイッシュ・コロンビア大 学宗教学部の飯田昭太郎助教授を中心とする日系カナダ人歴史研究会がはじめた、「忘れられた日系カナダ人史」(The Forgotten History of the Japanese-Canadians) シリーズの第一号。八十五ページの小冊子で、第一部と第二部からなっている。第一部(二十二ページ)は林林太郎著「黒潮の涯に」(日貿出版社、一九七四年)の最初の四章を省訳したもので、第二部は日系カナダ史に関する一部解題つき日本文および英文文献目録(六十三ページ)となっている。

「忘れられた日系人史」シリーズの意図は、編者の飯田氏がこの本に寄せた文章によると、一世や二世の日系カナダ人がへてきた苦勞と闘いの歴史を、それによって大きな恩恵を受けてきた三世以降の世代に伝えたい、ということにあるらしい。おそらくこの観点からであろうが、

英語訳は中学生でも理解できるように平易、かつ簡潔になされている。

第一部の四章とも、一九二〇年代から三〇年代にかけて、白人の漁師や議員などからさまざまな圧迫を受けながら、それに打ち勝っていった日系漁師の物語からなっている。第一章は、日系人への帰化証発行に常に好意ある計らいをしたダリー判事と、その「ダリー判事帰化証」の合法性に異を唱える排日主義者ステイブンズ州議員、ダリー判事帰化証とそれに基づく漁業権の有効性を主張する日系人たちの話。第二章は、日系漁夫の締め出しを図る政府措置について。第三章は、日系漁夫にだけは禁じられていたモーターボートの使用を法廷で勝ち取ったキサー・ジュン氏のこと。第四章は、一方的に設定された漁区を「侵犯」した日系漁夫たちの裁判と弁護士ノリス氏の熱弁、漁区法の撤廃に関する話からなっている。第二部の文献目録は完全ではないが、日系カナダ人について研究しようとする人には大いに役立つだろう。

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

東京都港区赤坂七丁目三番三八号
カナダ大使館広報部